

2008年2月6日

学校法人学習院長 波多野 敬雄 殿

DOCOMOMO Japan 代表

鈴木 博之

## 学習院ピラミッド校舎群の保存活用に関する要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認めその保存を訴えることを目的のひとつとする、世界45カ国が加盟している近代建築保存の非政府国際組織 DOCOMOMO (Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of Modern Movement = モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織)の日本支部です。

この度、貴大学はピラミッド校舎群を取り毀し、跡地に地下1階地上11階建の中央教育研究棟（仮称）を新築すると、仄聞いたしております。

ご高承のように、学習院大学のピラミッド校舎群は、「学習院創立85周年・私学再建15周年記念事業」の一環として、ピラミッド校舎のほか、北1号館、南2号館、本部棟とともに、建築家前川國男の設計、大成建設株式会社の施工により1960年7月に竣工しました。当時の学習院長安部能成が「建築は現代の科学と芸術の成果を顕現する」と考え、新たに新築する校舎群の設計について、学習院文学部長で美術評論家の富永惣一の紹介で前川國男に協力を求め、学校と設計者の熱意と努力により、完成したものです。

前川國男（1905～1986）は、1928年大学卒業すると同時に渡仏し、世界的建築家ル・コルビュジエのアトリエで学び、帰国後、半世紀にわたり、日本のモダニズム建築を主導した建築家です。この学習院大学において、前川は初めて単体の建築ではなく複数の建築と広場から成る群としてのデザイン手法に取り組み、その後、埼玉会館や東京都美術館等で、その手法をさらに発展させています。

中庭の中心に設けた中央教室は、中庭が建物の谷間とならず光と広い開放感を得るため、四角錐の形となり、その形態からピラミッド校舎と呼ばれています。この建物には、以下のように、戦後前川的设计手法の代名詞となった「テクニカル・アプローチ」という技術性を考慮した手法の特徴がよく表われています。

ピラミッド校舎では、四角錐を構成する4つの三角形スラブは、各稜線に平行な網目状の交叉梁架構と、斜面になった客席のスラブで中間部分を支持することにより、無柱の空間が作り出され、教室内部は教師と学生が一体となる教壇を包み込む階段教室とし、構造の形式がそのまま内部空間の表現になっています。さらに、客席の下はスラブ天井になっており、デッドスペースとなりがちな建物下部の周囲を、人々が行き交う廻廊として活かしています。さらに、建物の外壁と屋根を兼ねたコンクリート・パネルによる外装の工法は、日本で初めてカーテンウォール工

法を実施した前川ならではの技術とデザインの力量を示すものであります。この技術は、その後「タイル打込みプレキャスト・コンクリート・パネルによる二重外壁工法」となって、山梨県立美術館、福岡市美術館等、晩年の到達点ともいうべき作品に結実します。

以上のように、技術を活用した独自の構造形式により大きな空間を無柱で実現していること、その構造形式が内観、外観の表現になっていること等、当時のモダニズムの建築の特徴をよく示すものとして、きわめて貴重な建物であるということが出来ます。

学問の自由と社会奉仕という大学本来の機能を通して建物の中に真の大学らしさを生み出すことを目指し、中央に中庭を配した校舎群を「学問のコア」と位置づけ、中庭を校舎群のピロティと廻廊でかこみ人々が集まる広場を構成しています。とりわけ、中庭の中心に建つ中央教室は「ピラミッド校舎」、「ピラ校」の愛称で呼ばれ、多くの卒業生と在學生に親しまれており、貴大学のシンボルとなっています。

武蔵野台地の森に囲まれたキャンパスの中に、南と西に建つ戦前の建物との関係をも考慮して建てられ、新旧があいまった新しい象徴的な風景を創出させることに成功し、当時、国内外の建築界において高い評価を得ました。4棟のうち本部棟はすでに改築されましたが、中庭を中心とした広場と3棟の校舎群は、半世紀近く経た今なお、当初の佇まいを良くとどめています。

貴下におかれましては、この建物の持つ歴史的価値とともに、計画当初に注ぎ込まれた大学関係者と設計者の先見的な意図と尽力をお汲みいただき、その保存活用について再考下さるよう、格別の配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、本会は、この建物の保存活用に関してできる限りのご協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具